



公益社団法人 日本柔道整復師会（日整）の会員は全国に約 17,000 人。様々な場所で技能を生かして活躍しています。その名も「日整 Man/Woman」の活躍ぶりを、紙面およびホームページで報告いたします。



氏名 楠美 明人（くすみ あきひと）

所属 公益社団法人 埼玉県接骨師会

会員歴 平成 13 年 4 月入会

ひと言 狭山市の大河原整骨院にて勤務後、開業と同時に入会。
休日は地元サッカークラブ（高校・社会人）の試合にて選手のケアを行い、チームをサポートしています。
趣味は旅行、犬の散歩。好きな TV 番組は『水曜どうでしょう』。

03. 日整だから出来る“技術の伝承”

モンゴル国でのプロジェクト

日整が JICA との共同事業で行っているモンゴル国での指導者育成・普及プロジェクトに 2012 年秋と 2013 年春に参加しています。

このプロジェクトは、地方のバグ（村）に出向いて、バグ医師を対象にした講習会を開催する地方班と、国立健康科学大学附属医療技術大学にて講義、実技指導する大学班に分かれて活動を行っています。今回は、大学班での活動について紹介します。

向上心を強く感じた大学での授業

大学での授業は、バグ医師養成コース 3 年生約 60 名を対象に行っています。また、国立健康科学大学附属ダルハン校ファーストエイドクラブの生徒 8 名も参加しました。地方で開催した講習会と同じ約 8 割の方が女性です。モンゴルでは交通事故、落馬による外傷が多く発生しています。

授業では、各種骨折・脱臼の理論から整復操作、針金 1 本から固定具の作成、副子の当て方、包帯の巻き方など実技を中心に指導しています。

放課後には、ファーストエイドクラブの生徒を対象に、三角巾の使い方、負傷者の搬送方法など、緊急時の対処法についての補講も行っています。



写真 1. 大学の教室で生徒達と

スケジュールも決まっていますので、全て指導することが難しいのが現状です。しかし、受講された生徒からは、新しい技術を身につけたい、少しでもいい医療を提供したい、外傷後の後遺症に悩む人を少なくしたいという向上心を強く感じます。



写真 2. 講義最終日には筆記・実技試験を行います

小さな成果の積み重ね

今回、講義を受講していた生徒が、モンゴル相撲にて負傷した左肩関節脱臼の疑いがある患者（生徒の兄）に対しコッヘル法を用いて整復操作を行ったとのことです。直後から疼痛は消失したとのことですが、患部の状態を観察してほしいと翌日、患者と一緒に我々の元を訪れました。

そこで、急遽特別授業として、受講生の前にて受傷機転、症状、整復操作の確認、患部の状態を再度観察してから、生徒本人による包帯、三角巾による提肘固定といった臨床実習を行いました。

また、卒業生が軍医として配属し、包帯を巻いた際に「巻き方が上手い」と褒められ、上官から「誰から教わったのか？」と聞かれた時に「日本から来た柔道整復師に教わった」と答えたそうです。少しずつではありますが、このような成果の積み重ねが、モンゴルの医療現場で継続的に活用されることにより、このプロジェクトが有意義なものとなります。



写真 3. 特別授業で包帯を巻いている様子

日整でのプロジェクトから学んだこと

日整の国際交流では、柔道整復術が医療インフラ未整備の国の人々ために、有効な治療法になると確認することができた場です。“技術の伝承”という共通の目的を持って、全国の先生方と一緒に活動し、柔道整復のことについて熱い議論をすることが出来たことも、自分の人生にとって得難い経験となりました。それらは、地域医療を支え、地域活動というものを大切にしている日整に所属しているからこそ出来たことです。今後も、先輩方から引き継いだ伝統・技術を、次の世代にしっかりと繋いでいくことと共に、日整が行う公益事業にも積極的に参加していきたいと思えます。



写真 4. JICA モンゴル事務所にて